

(様式 1)

「地域・企業等と連携した PISA 型読解力向上事業研究指定校」実績報告書 (2 年次)

1 学校名等

学 校 名	宇治市 立 広野 中学校				校長名	藤本 いずみ
研 究 主 題	自分の思いや考えを受け手の状態に応じて丁寧に伝えられる生徒の育成					
研究の目的	これからの変化が激しい社会では、認知能力だけでなく、学ぶ意思・意欲や学ぶ方法といった社会情動的スキル（非認知能力）を併せ持つことが大切である。認知能力と非認知能力の一体的な育成には、認知能力、非認知能力それぞれを意識した取組を行うと同時に、自らの状態を認識・説明したり、受け手の状態を分析・確認しながら、自らの思いや考えを伝えていく必要がある。また、高度な自己認識や現状分析には当然、それを言語化できる語彙力が必要であり、そのような意味においても、認知能力と非認知能力の一体的な育成は大切であると考えられる。 そこで、生徒自身の「～したい」という思いや「～になって欲しい」という感情を論理的な裏付けを持って説明する経験を通して、社会に出た際に、主体的な意思を持ち、かつ論理的な裏付けのある行動がとれる人材へとつなげていけるのではないかと考えている。					
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	5	6	5	3	1 9	3 8
生 徒 数	1 8 7	2 1 0	1 9 7	8	6 0 2	

2 研究校の概要

(1) 学校概要

宇治市の南部に位置し、学年5学級規模の生徒数約600名の学校である。近隣には太陽が丘や宇治市植物園等があり緑に囲まれた環境にある。

(2) 生徒の状況

- ・まじめでコツコツ頑張る生徒が多い。
- ・自分の意見を発表したり、思いを伝えたりすることに苦手意識のある生徒が多い。
- ・テスト等の記述問題では、以前は無回答の生徒が目立っていたが、改善されている。

(3) 学力の状況

- ・全国学力・学習状況調査の結果では、どの教科も全国・府平均程度ないしは少し下回る程度である。
- ・一方で、努力が成果に結びつかない生徒も一定数おり、得点分布にバラつきがみられる。
- ・質問紙調査の結果についても、概ね全国・府平均程度である。

3 主な研究活動

(1) 各教科での授業改善（通年での活動）

各教科における見方・考え方を大切に、全ての教科で以下の取組を行った。

- ・各教科による課題解決型の学習（PBL）の要素を取り入れた改善（継続発展）

認知能力と社会情動的スキル（非認知能力）の一体的な育成のための一つの方策として課題解決型の学習は有効であると考えられる。

各教科の特性を踏まえて、単元やまとまりを意識して解決すべき問いを単元やまとまりの冒頭に提示して、その後の授業内容が解決に向けたステップになるように設定した。また違う教科では、最終の課題解決をレポートの形で課し、考えたことを論理的にまとめるように促した。

- 個人の伸びの見える化を目指した改善（継続発展）

本校では昨年度に引き続き、京都府教育委員会より「新たな学力分析の在り方に係る調査研究」の調査研究校にも指定されているが、この施策は年1回の学力・学習状況調査を通して、生徒が個人の学力の伸びを実感できるという特徴がある。それと同時に普通の授業場面でも生徒個人が自らの成長を感じられる場面を設定することは非常に有効である。ある教科では、個人内の考え方の変化を捉えさせるために、単元の最初に単元末の課題について予想を立てて、単元の終わりにその予想を検証するようにした。また、実技教科においては作成する作品の様子を毎時間タブレットで撮影して、ポートフォリオのように使用したり、技能の上達を時系列で追うことによって、生徒個々の学びや努力の成果が見える化できるようにした。

- 到達目標の共有に向けた到達点（ループリック）の設定（本年度新規）

各教科の授業改善の取組の中で、生徒が課題に取り組む際の道しるべや目標になるような指標の設定をおこなった。この指標は評価の際の基準となるだけではなく、それぞれの教科の見方・考え方やその単元や内容のまとまりの中での学習のポイントと、そのポイントをどの程度の視野や深さで理解・思考して欲しいのか、を示すという役割もある。

多くの教科で文章表記での回答を求める課題を出題しているため、「思考・判断・表現」を中心としたものであったが、学習指導要領が示す3観点それぞれについて設定をしている教科もあった。生徒にわかりやすい表現等も含め、今後も検討が必要である。

（2）総合的な学習の時間を軸にした取組

- 教科を貫く総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の課題解決型学習は、各教科の見方・考え方を複数使い、総合的に事象を捉えてその内容を理解、利用、評価、熟考するというPISA型読解力が試される場としての価値を持っていると考えられる。そこで、昨年度に引き続き2年生で「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に参加をし、地域課題の解決などの取組をおこなった。

- きょうと明日へのチャレンジコンテスト（9月～1月）

京都府教育委員会主催の「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への参加を通して、株式会社京都パープルサンガからの「地元プロスポーツクラブとして、地域の皆様に愛されるクラブとなるにはどのような活動をすれば良いでしょうか」という課題に2年生が取り組んだ。

企業そのものを理解するところから始まり、プロスポーツクラブの社会的役割といったことから、地域がプロスポーツクラブに求めていることまでを、調べ学習だけではなく、校外学習において京都市内でのインタビュー調査も行い情報そのものを入手する過程から体感をした。

4 今年度の研究の成果と検証

(1) 各教科での授業改善（通年での活動）

・各教科による課題解決型の学習（PBL）の要素を取り入れた改善

授業改善の取組として、課題解決型の学習を取り入れた上で、単元やまとまりを意識した授業展開が見られるようになった。ある教科では、単元の導入時間で1時間ごとの授業の課題と単元課題の全てをプリントで示し、各時間の振り返りをそのプリントに記入していくことによって、単元課題に取り組むための考え方やつながりがわかるように工夫されていた。また、別の教科では、文章記述をさほどしてこなかった教科の課題が文章表記で回答するように設定されており、文章にまとめていく際の論理的な思考を引き出す工夫をおこなった。

PISA型読解力は文章に限ったものではなくテキスト全てを活用することを求めており、文章の割合が多い現状には留意する必要があるが、生徒の回答はその分量、内容とも増加・深化している様子が見られた。

・個人の伸びの見える化を目指した改善

当初、各授業で出される課題の多くはその授業や単元で独立した課題となることが多く、それぞれで完結している印象が強いものであった。しかし、取組を進めていくうちに、単元内のそれぞれの授業で提示される課題の関連性や単元課題ごとの関連性などを意識した課題が見られるようになってきた。それぞれの教科の特性から、もともと単元をまたいでその関連性が強く意識しやすいものと、全く分野が変わる等で関連性を意識しにくいものがあるため、全ての教科や単元で関連性を持たせた展開は難しい部分があるが、その部分の見極めも含めて授業内容をメタ的に捉えられるようになったことは大きな成果であった。

・到達目標の共有に向けた到達点（ルーブリック）の設定

課題解決型の学習では、その答えが一つに決まることは少なく、解答そのものというよりもその考え方や思考の過程を問うている場合が多い。そのような出題の場合は、その評価の仕方が非常に難しいだけでなく、出題する側が求めている解答の質を解答者である生徒にイメージさせることにも工夫が必要である。そのような課題の解決にもルーブリックの作成は有効な手立てになると考えられる。また、ルーブリックを作成すると、出題する側である教員も解答者である生徒に求める質についてより強く意識することになり、授業そのものの中での的を絞った展開をすることができるとの感想もあった。

(2) 総合的な学習の時間を軸にした取組

・教科を貫く総合的な学習の時間

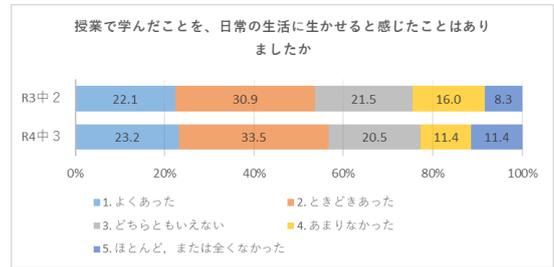
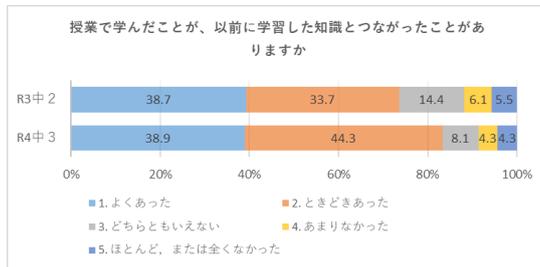
総合的な学習の時間での課題解決型の学習は、各教科での育成を目指す資質・能力との関連を意識しながら進めていくことが大切である。逆に、各教科においてもそれぞれの教科の学びと社会との接点を意識した上で、社会に出た際に必要となる資質・能力の育成を目指すことが求められる。

総合的な学習の時間で、企業と連携した課題解決型の学習に取り組むことは、それぞれの教員が教科の専門性だけでなく、社会との接点を意識する機会となり、教科の授業改善が社会との接点を意識したものになった。

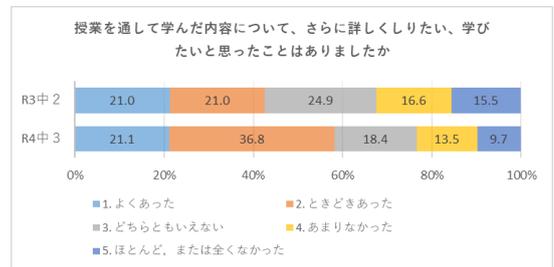
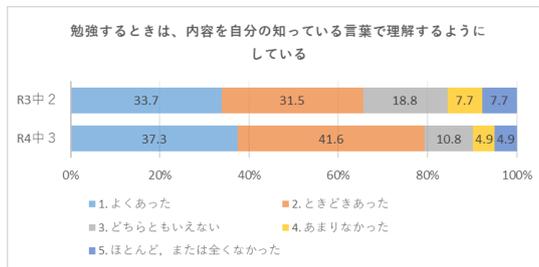
(3) 生徒の変容

教員の意識と取組による授業改善と同時に、生徒の意識にも変化があった。

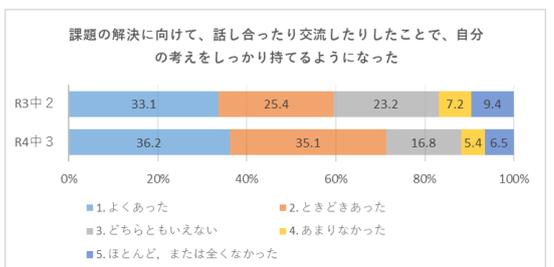
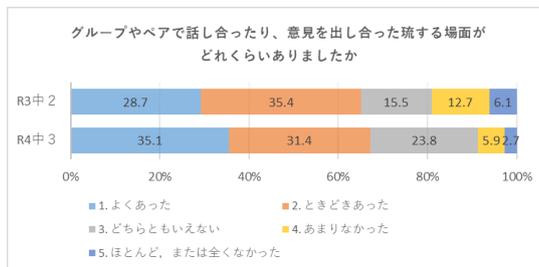
ここから示すグラフは、今年度中学校3年生が、中学校2年生時の5月と3年生の5月に質問紙調査をおこなったものである。



授業で学んだことと以前の学びとのつながりを感じたと回答した生徒は、72.4%から83.2%と10.8ポイント増加した。一方で、授業の学びに日常生活との関連については、53.0%から56.7%へと3.7ポイントの微増にとどまった。



学習の内容を理解する際に、生徒個々で内的な変化がみられた。学習内容を自らの言葉に置き換えて理解しようとする（65.2%→78.9%）が進み、学びの中からさらに興味を持って前向きになる生徒が増えている（42.0%→57.9%）ことが読み取れる。



グループワークなどの場面については、生徒はさほど頻度が増えたという感じを受けていないが、話し合いや交流の中で自分の考えをしっかりと持てるようになったと回答した生徒は、58.5%から71.3%と12.8ポイント増加した。質的な深まりがあったと思われる。内的な学習への意欲向上と対話的な学習の両面から、意欲的に学ぶ様子が示唆された。

5 今年度の課題と来年度の研究構想

教科を中心にその要として地域社会と連携した課題解決型の学習を総合的な学習の時間でおこなってきた。次年度は、教員の体感としてある、認知能力の上昇傾向を堅持し生徒の学習への意欲をその結果につなげたいと考えている。そのために、読書活動推進等による基礎力の向上と、授業改善の継続、ルーブリック作成による目標提示と評価を通して、生徒個人内の学習意欲向上、思考の深まりに裏打ちされたコミュニケーションを引き出していきたい。